

たそがれ  
黄昏の闘い

かぶらやこうし  
鏑谷嚙矢

「ここはどこだ？」

目覚めて最初に口にしたのは、その言葉だった。

言ってから自分でも驚く。声が全く反響せず、まるで前方の空間に吸い込まれて行くような感じがしたからだ。

目の焦点も、うまく合わない。

頭がぼんやりとして、眠る前の記憶もはっきりしない。名前は……名前だけはなんとか分かる。俺は、なんでこんなところにいるんだ？

「ここが、どこかなんて関係ないんだよ」

すぐ耳元で男の声がして、腰を抜かしそうになった。

声の方を見ようと思うが、体が動かない。痺れたように指一つ動かせなかった。

しばらくすると、ようやく体の感覚が戻ってくる。

背中と後頭部に硬いものを感じた。どうやら仰向けに寝ているらしい。

「うう……」

呻きながら体を起こし、頭を振ると気分がましになった。

「フラフラするんだろう。始めのうちはそうさ。段々と慣れてくる」

声の方を見ると、男が座っていた。

若い男だった。知らない顔だ。顎に大きなホクロがある。

だが、男は、いつもツルんでいる友達とは、どこか違う雰囲気を出していた。

何か妙な感じがする。それが何か分からなくて、俺は少し不安になった。

男の言葉を、あえて無視してあたりを見回す。

ビル街だった。それも、ちよつと古い感じの、コンクリート造りの背の低いビルが並んでいる。

俺と男以外に人影はない。

手をついて立ち上がると、軽くよろめいた。

左右に長く歩道が続いている。俺は今まで路上に寝ていたのだ。どうりで背中が痛いわけだ。

ビルの上に広がる空は、ちょっと見たことのない暗い赤褐色だった。今は夜なのだろうか？

褐色の空の真ん中には、杭で穴を開けたような満月が輝いている。

男はビルの前の階段に座っていた。

明るいう月が濃い影を作っている。

しかし、どうも目の具合が良くなかった。遠くがはっきり見えない。近くはよく見えるが、ある距離から先が突然ぼやけてわからなくなり、その先は闇になってしまう。

「どうした」

男が尋ねた。

「何だか目が変わだ」

「ああ、近くしか見えないんだろう。そうなってるんだ。心配するな」

「そうなってるって、なんだ？」

「お前、新入りか？」

すぐ近くで別な声が出た。慌てて声の方角を見る。

年寄りではないが、それほど若くない男が

歩道をこちらに向けて歩いてくる。

「どうするんだ。もうすぐ始まっちゃうってのに、ド素人が入っていたら、話にならないぜ」

フケ顔が慥然と言いつつ。

「今回は何人いるんだ」

「こいつを混ぜて五人だな」

「あとの二人は？」

「こっちに向かってるだろう」

男が言い終わらないうちに、ビルの角から背の高い男が姿を現した。

「おう」

軽く手を挙げ、男たちは挨拶を交わしている。

「ちよっと待てよ、ここはいつたいどこなんだ？あんたら何者だ」  
俺は頭がこんがらかって叫んだ。

「だいたい、この服は何なんだ」

さつき気づいたのだが、俺たちは、みんな、妙にびったりとした深紅の服を着ているのだ。

「うるさいわねえ。文句言わないの」

背後から女の声が出た。

振り返ると、ショートカットの女が立っていた。体にぴったりしたミニスカートをはいている。

「わたしだって、こんな格好をしたくないのよ。でも、今回の奴の好みなんだから仕方ないの」

しばらくは何も言えなかった。女は、俺が見たこともないような、きれいな顔をしていたからだ。

「ともかく、今回の素人は、この兄さんだけってことだな」

背の高い男が言う。

「まずいな。実質四人でやることになるぜ」

フケ顔がため息をついた。

「黙っててくれ。今、作戦を考えているんだ」

いつのまにか、アゴボクロは、リーダーの役目を果たしている。

しばらくこめかみを揉みながら考えていたが、やがて、俺に向かって、

「まず、自己紹介をしておこう」

そう言っって背筋を伸ばし、俺は田中だ、と名乗った。

フケ男は山本と言い、背の高い男は吉田、女は松本と名乗った。

「あんたの名は」

田中が尋ねる。

「矢野タケシ」

「そうか、タケシ。時間がないから手短かにいうぞ」

田中が、そう言った途端、遠くから風を切る鋭い音が近づいてきた。

「まず逃げろ！」

そう言って田中は俺を突き飛ばした。

「おい、手短過ぎるぞ」

文句を言いかけた俺のすぐ脇をかすめて何かが飛んでいった。

振り返ると、背後の壁に、太い槍が突き立って震えている。

「うわぁ」

叫び声を上げる俺の手首を、誰かが掴んだ。

松本だった。

「こっちへ来て」

俺はとりあえず、彼女の後について走った

ビルとビルの隙間に飛び込む。

身を隠したとたん、大きな影が目の前を走り過ぎた。

「何だ、今のは？」

思わず俺は叫んだ。たった今、目にしたものが信じられなかったのだ。

「そ、そんなはずはない。あいつらの訳がない」

呟きながら、ビルの陰から顔を半分出して通路を見た。

そいつは、意外なほど近くに立っていて、俺は腰を抜かしそうになった。

幸いなことに向こうを向いているために、俺には気づいていない。

「何してるの！」

背後で、押し殺した松本の声がして、強い力でビルの陰に引き込まれる。

「見つかっただらどうするの」

「あれはなんだ？」

「見たままよ」

「信じられない」

「信じなさい。自分の目を」

「松本さん、あなたにも同じものがみえているのか？」

「加世でいい。みんなそう呼ぶから。そうよ、あいつらは、アレをよく使うの」

俺たちのすぐ近くに立っていたのは、オケラだった。

あの土を掘るオケラだ。

だが身長二メートル五十はあるモンスターだ。

そいつらが二本足で立って、武器を使って俺たちを襲おうとしている。

「あはは」

思わず俺は笑った。こんなことがあるわけがない、夢、そうだきつと夢に違いない。そう考えれば、突然、こんな世界で目覚めた理由もわかる。思わず俺はそう口走っていた。

それを聞きとがめた加世が冷たく言い放つ。

「残念だけど、これは夢じゃないわ。あいつらに殺られたら死ぬの。現実だね」

「馬鹿な」

「馬鹿はあなたよ」

「いったい、これは何なんだ？ここはどこなんだ」

「これは殺し合いで、ここは戦場よ」

加世は怒った。

「でも、でも、いつの間に俺は、殺し合いに巻き込まれたんだ？」

その時、落下音がして、ビルの前の道が吹き飛んだ。破片が路地に飛んでくる。

「奴ら、私たちの位置をつかんだみたい。移動するわよ」

「嫌だ、訳がわからないまま死ぬなんて。説明しろ」

「いいわよ。全部説明してあげる。でも、今は駄目。このままここにいと、説明する前に二人とも死ぬことになる」

そういって、加世は路地の奥へ走り出した。

慌てて俺も後に続く。

路地は入り組んでいて、迷路のようになっていた。  
その細い通路を、右に左に曲がりながら加世は走り続ける。  
形の良い足が、目の前でひらめくのを見ると、俺は夢を見ている  
ような気になってきた。

その間も、至る所から爆発音が聞こえてくる。

「君はここに詳しいのか？」

走りながら話しかけても加世は答えない。

しばらく走り続けて息が上がった頃、ようやく加世は路地に腰を下ろした。

「ここまでくれば大丈夫」

爆発音はまだ続いているが、かなり遠くになっていた。

「さあ、説明してくれるんだろう」

「うるっさいわねえ。あなたも男なら、ごちゃごちゃ事情を知ろうと思わないで、まず生き残ることを考えなさい」

「こんな狂った世界で死ぬのはごめんだ」

「はいはい」

加世はうんざりした表情で肯いた。

「まず……君は何者なんだ？」

「松本加世」

「人間なのか？」

「当たり前じゃないの。何だと思っているの」

「いや、俺たちはロボットで、兵器開発のために闘わされているとか…

…

「はあ？」

「何でもない。そうじゃないんだな。だとすると、ここはどこだ」

「わからない」

「何だって」

「言った通りよ。ここがどこか、私たちも知らない。でも、ここが戦場で、ここで死んだら本当に死んでしまうという事は分かっているの」

「あいつらは何だ？」

「選ばれた兵士よ」

「誰に？」

「ゲート・キーパーに」

「何？」

「私たちは、そう呼んでるの」

「何者なんだ」

「わからない」

我慢の限界だった。

「もういい」

そう言って、俺は立ち上がった。

「こんな馬鹿な芝居につきあつてられない。俺は出て行く」

「出て行くって、外では、奴らが私たちを殺そうと待っているのよ」

「そんな馬鹿げたことがあるものか。これはきつと夕子の悪い悪戯なんだ。俺は出口を探す」

「駄目よ、駄目。ここで死んだら、本当に死んじゃうのよ。私なんかはもう死んでもいいけど……」

加世の強い口調に気圧されて、俺の怒りは急速に萎んでいった。

「あなた歳はいくつ？まだ若いんでしょ」

自分も二十歳過ぎの加世が呟くように言った。

「だったら死んじゃ駄目」

そう言って、加世は立ち上がった。手を振る。

その視線を追って振り返ると、路地の向こうから田中たちがやって来るのが見えた。

「遅かったわね」

「すまん。こいつが、思ったより遠くに置かれていたんだ」



そういつて、田中は、脇に抱えていた枯れ枝のようなものを地面に置いた。

「しかし、なんで、奴らには先に武器を渡すくせに、俺たちには、わざとわかりにくい場所に置くんのだ」

吉田が拳を掌にたたきつけた。

「仕方ないだろう。最近、俺たちの方が分が良いから、奴らにハンデをつけているつもりなんだろうな」

山本が目尻に小じわを寄せた。

「命がけの闘いで、ハンデもないぜ」

その言葉に、吉田が何か言おうとするのを遮って俺は尋ねた。

「待ってくれ。さつきから聞いていたら、俺以外の者は、何度かここで闘っているんだな」

「そうさ。そして生き残っている」

吉田が胸を張った。

「どうして、闘わなきゃならないんだ。この闘いはいったいなんだ」

「それはだな」

田中が顎をかきながら言う。

「この闘いに勝ったらわかる」

「死んだらどうするんだよ。死んだら死ぬんだろ」

田中はくつくと笑い、

「なかなか、うまく言うな。死んだら死ぬ、その通り、そして死んでしまったら、この闘いがなんであるかなんて知っても仕方がない。今、一番大切なのは、この闘いを生き残ることなんだ。まあ、お前は、まだ若いから分からないだろうが、人生なんてのは闘いの連続なんだよ。特に、お終いの方はな」

そう言って、田中は大きく息を吸った。

「中には、この闘いに嫌気がさして、死んでもいいと思っっている者もある。それは、集団の闘いにおいて危険なことだ。だが……」

田中にはやりと笑い、加世をみた。

「新しい坊やが参加して、ちよつとやる気が出てきたようじゃないか」  
その時、心なしか、加世の頬が染まったように見えた。

「馬鹿なことを言わないで。わたしはいつも生き残るために全力で闘ってらるわよ」

「分かった分かった。それじゃあ、こいつを取ってくれ」

そういつて田中は、枯れ枝を差し出した。

太さ二センチ、長さ四十センチほどの、なんの変哲もない枝だ。

「これは？」

「武器さ」

「馬鹿にするな！」

俺は、差し出された枝を払いのけた。枝は地面に散らばる。

「向こうは爆弾を使ってるじゃないか」

「頭の硬い奴だのう」

山本が年寄りじみた声で言った。

「この世界が普通じゃないことは分かってきているだろうに。こいつだつて」

山本は一本の枝を地面から拾い上げた。

「よし、これでいこう」

そう言った途端、枝は巨大化し、迷彩色の施されたロケットランチャーになった。

「じゃあ俺は行くぜ」

そう言い残すと、巨大なランチャーを軽々と担いだ山本は、路地を曲がって姿を消した。

次いで、ひよろりと背の高い吉田が枝を拾うと、それは銀色に光る巨大な拳銃に変化した。

「俺も行くよ」

「じゃあ、俺たちも行くか、おい、早くそいつを拾え」

加世の手の中で、枝は細長い銀のサーベルに変わる。

田中は、枝を、見たことのある形の銃に変型させた。

「ルガーみたいだが、ちよつと変わってるな」

俺の言葉に田中は頬を歪めて笑った。

「南部一四年式、俺にはやっぱりコイツが一番あっているな」

「はい、早くこれを持って」

加世が、俺に枝を渡した。

「どうやるのか分からない」

「簡単だ。そいつに意識を集中して、自分の好きな武器を思い浮かべるんだ」

「原爆とかは駄目なんだろうな」

「構わない。ただ、こいつひとつの破壊力は決まっているから、さつき奴らが投げていた爆弾程度の威力しかない原爆ということになる」

「じゃあ、飛び道具の方が徳か」

「そうとばかりは言えない」

田中は銃を服のベルトにさすと言った。

「すまんが、時間通りに行動しなければならぬんだ。移動しながら話をしよう」

田中、俺、加世の順に並んで通路を走りだす。

「なぜ飛び道具が得じゃないんだ」

走りながら俺は尋ねた。

「攻撃できる距離が増えると破壊力が弱くなるんだ。例えば、俺の銃は、奴らの急所である頭に当たるか、五、六発命中させないと殺せないが、加世のサーベルなら、一撃で相手に致命傷を与えることができる。うまくバランスが取れているのさ」

「まるでゲームだな」

「多分、ゲームなんだろうな」

田中は言った。

「つまりは遊びか？ゲート・キーパーって奴らの？」

「それはわからないが」

「何度も闘っているんだろう」

「そうだ、だが、何度闘ったって分からないこともある」

——山本だ。予定の位置に着いたぞ。

突然、声が聞こえた。

「なんだ？」

「武器に意識を集中すると、仲間と通話ができるのよ」

加世が背後から言う。

数分後、三人はビルの屋上にいた。

四階建てのビルで、内側に吹き抜けがあり、すぐ下に中庭が見える。

「ここがいい」

「こんなところでどうするんだ」

「さっき別れた二人が、中庭に奴らを追い込んでくるのを待つ。これまでに何度かやった戦術だ。心配するな、俺たちは勝つよ」

「向こうの人数は、こっちと同じなんだな」

「そうだ」

「奴らも同じような武器を持っている？」

「そう」

「そいつらを全員倒したらこの闘いは終わり」

「この世界の事が少しは分かってきたようだな」

田中が笑った。

「こんな馬鹿げた世界が分かったって仕方がない」

「ではアドバイスだ。お前は、まだここで目覚めて時間が経たないから、この世界で頭が働いていないんだ。だが、そのうち頭が働きます。そして、ここへ来る直前に、何をしていたか思いだすんだ。思い出せたら、もっと武器を自由に操れるようになるだろう」

「さあ、早く武器を決めて。奴らが来る」

加世が真剣な顔で催促する。

俺は、手にした枝に神経を集中した。

枝は俺の手を離れ、地面に落ち、巨大化し始めた。

むくむくと大きくなった銀色の固まりは、徐々に形を整えた。

「驚いたな。こんな武器を考えた奴は初めて見た」

田中が感心したように言う。

「でも、案外良いかもしれないわね」

田中と加世の言葉を背に、俺はできあがったばかりの赤いスクーターにまたがった。

「俺は武器なんて持った事がないから、たぶんうまく使えないだろう。

だけど、こいつなら毎日乗り回しているから」

突然、頭に衝撃が走った。

頬に受ける風、走りすぎる風景、そして……。

「何か頭に浮かんだか？」

田中が尋ねる。

「嫌、何だろう。今、一瞬、何かが頭を……」

「それは、さっき言ったお前の記憶だ。ここに来る前の。今度、やってきたら逃がさず捕まえる。そうすれば、俺たちが、今やっているように、さまざまな知識を、空中から手に入れることができるようになるはずだ」

「なんだって？」

「俺たちのほとんどは戦闘の素人だった。だが、曲がりなりにも勝利しているのは、知りたいことに集中すると、知識が頭に流れ込んでくるからなのさ」

「じゃあ……」

「お前が何を考えているかは分かる。だが駄目だ。この世界についての知識は限定されていて、ほとんど入ってこない」

「待って」

加世が叫んだ。

「来たわ。奴らよ」

屋上から身を乗り出すと、吉田と山本の二人が、中庭に駆け込んでくるところだった。

二人を追って、怪物どもが入ってくる……が、何かがおかしかった。

二人を追って入ってくる怪物は、三匹や四匹では無かったのだ。

「どうしたんだ、奴らは俺たちと同じ数じゃないのか？」

「畜生、ルールを変えたな！」

田中が叫んだ。

「俺たちが、あまりに生き残り過ぎるから、ルールを変えやがったんだ」

「どういうことだ？」

「難易度を上げた、ということさ。そのかわり、今は、奴ら、武器を持つていない。バランスは取られているようだ」

「解説なんていいわよ」

今や、中庭はモンスターであふれかえっている。

「百や二百じゃない。千はいるわ」

吉田と山本は懸命に銃とランチャーを撃って身を護っている。

「このままじゃ二人が危ない。行くわ。バックアップをお願い！」

そう叫ぶと、加世は手すりを飛び越えて、モンスターたちの中に落ちていった。

赤いミニスカートの裾のはためきが、最低な光景の中で、不釣り合いに美しい。

だが、俺は、その姿を見ながら、ただ震えていた。赤いスクーターにしがみついて、ガチガチと歯を鳴らしていた。

飛び降りた加世の働きは素晴らしかった。

細身のサーベルを縦横無尽に振るって、次々とモンスターを倒していく。

だが、倒れたモンスターが消え去る訳ではない。

倒せば倒すほど足場が悪くなる。

ついに、加世は、倒れたモンスターに足を取られてバランスを崩した。上から襲いかかるモンスターを切り伏せて再び立ち上がる。

「タケシ！」

屋上から、加世を狙うモンスターを狙い撃ちしながら田中が言った。

「勇気を出せ、加世を助けてくれ」

「行きたい、けど、あんなに化け物がたくさん。俺は二、三匹だと……

俺、俺、怖いんだ」

「死ぬことを恐れるな」

「駄目だ、死ぬのは怖い」

「タケシ、頼む」

「無理だ」

「タケシ……生きろ。お前は、お前は今、死にかけてるんだぞ！」

突然、スクーターが粉微塵に砕けた。

俺は横倒しになる。

一瞬、頭が真っ白になった。空白が来て……。

「ああ分かった。今、分かったよ」

スクーターが砕けたのは幻覚であり、事実だったのだ。

「行け、タケシ！」

田中の言葉を背に、俺はアクセルグリップをひねると、階段に向かって突っ走った。

中庭では、山本と吉田が、モンスターに埋もれるように闘い続けている。た。

外に出ようにも、出口がモンスターで埋まっているのだ。

「畜生。五匹と闘うつもりが、千匹とは酷すぎるぜ」

「まったくだ」

加世はモンスターを斬りながら、なんとか、二人と合流しようとしていたが、相手の数が多すぎて思うようにいかない。

やっと、吉田のすぐ側まで来た時、加世は再びバランスを崩した。間の悪いことに、倒れかけたその上から、横斬りにしたモンスターが倒れて、足を挟まれる。

「しまった！」

モンスターの鋭い手が、加世の顔に突きつけられた。

しかし、衝撃は来なかった。そのかわり、暖かい何かがどさりと上に落ちてきた。

「大丈夫か、加世さん」

吉田が加世の身代わりにモンスターの棘の受けていたのだ。

「健さん、どうして」

「久しぶりに名前でも呼んでくれた。嬉しいよ」

だが、その間にも、次のモンスターが、二人に迫ってくる。

表情を全く浮かべない黒い目が不気味だ。

「加世さん、あんたは生きる。たとえ短かい間でも」

吉田は、そういうと、加世の上に乗ったモンスターの死骸を渾身の力を込めて押しつけた。

同時に、数匹のモンスターの鉄に体を貫かれる。

「健さん！」

加世の悲痛な叫びをよそに、モンスターの一匹が、手の巨大な鉄で加世の首を挟もうと近づいてきた。

その時、轟音が轟いて、モンスターは吹っ飛んだ。

「大丈夫？加世さん」

「タケシ！」

「もう心配ない」

そういつて、タケシは、赤いスクーターを反転させた。次々と、モンスターに体当たりさせる。

柱の影に隠れながら、山本もロケットランチャーを撃ち続けている。

徐々に活動できるモンスターは減っていった。



「あいつ、よく頑張っているな」

傷ついた加世を背に、拳銃の弾幕を張って、闘いながら田中が言った。

「今まで、スクーターを武器にした人なんていないから、あいつらも戦い方がわからないのよ」

「そうだな……ところで」

田中は銃を撃ち続けながら言った。

「二人でいる時、あいつに俺たちが何者か言わなかったんだろう」

「ええ、言わなかったわ。なぜかしら」

そう言って、加世は美しい眉をひそめた。

「別に、それでいいじゃないか。もう、あいつは、自分の力で、この事を知ったはずだから」

モンスターは、あと二十四匹ほどだ。

飛び出た奴らの黒目を睨みつけながら、俺はスクーターで体当たりをした。

闘いながら、俺は、この世界の多くを理解していた。俺が、ここへ来る前に何をしてきたか分かった瞬間から、頭に知識が流れ込んでいたのだ。

最後のモンスターを打ち倒すと、俺はスクーターのエンジンを切った。急にあたりが静かになり、後には、累々たるモンスターの死体だけが残った。

スタンドを立てて、加世と田中に近づく。

山本も無事だったようで、ランチャーを引きずりながらやって来る。

「よく勇気をだしたな」

「どうせ、俺はもう半分以上死んでいるんだ。そうでしょう？ だったらやることをやった方が後悔しなくてすむ」

田中は力強く肯いた。

「さあ、ここを出よう。タケシ、お前、加世に肩を貸してやってくれ。俺は吉田さんを担いで行く」

「分かった」

俺は、加世に近づくと腕を持って立たせた。

「大丈夫？」

「なんとかね。でも、吉田さんが……」

俺は黙って歩きはじめた。加世に合わせて話をするほど、吉田について多くを知っていなかったからだ。

——どうやら、お前たちが勝ったようだな。道路に出ると、空から声が降ってきた。

見上げると、暗褐色の空に浮かぶ満月に、瞳が浮かんでいた。まるで、空に開けた丸い穴からこちらを覗くかのように。

「俺たちの勝ちだ。ゲートキーパー」

田中が言った。

——勝ったのはお前たちではない。結局、お前たちのうちの一人は死んだ。我々は、お前たちのうちの誰かが死ねば良かった。お前たちが勝ち続けることが問題だったのだ。

「なんだと」

山本が唸った。

「馬鹿にしやがって。だから勝手にルールを変えたのか」

田中は取り合わなかった

「どちらが勝っても良い。早くもとの世界に戻してくれ」

——良いのか？お前たちのほとんどは、元の世界より、こちらの方が良いのではないのか？

「他の生きものを殺して生き延びるこの世界より、向こうの方が良いに決まっているだろう」

田中がきつぱりと答える。

——利口になったな。最初に比べたら考えられないほどだ。おそらく、この空間に埋め込んでいる知識を、うまくくみ取った結果だろう。まさしくこれは両刃の刃。もとは虫である、あの者どもを一人前の兵士として使うためには、空間に知識を充満させておかねばならない。それが、結果として、お前たちに知恵をつけさせることになってしまおうとは。

ともかく、よくお前たちは闘った。

今日が、お前たちの最後の闘いだっただ。

「最後？なぜ最後なんだ？」

——お前たちに説明する理由はない、が、教えても問題はないだろう。我々の上位者が、長い休みを終えて、こちらに戻ってくるのだ。だから、この闘いは終わりだ。

「つまり、お偉いさんが帰ってくるから、息抜きのゲームはおしまいつてことだな」

田中が嘲るように言う。

——今日、生き残った褒美に、この世界でずっと生きていくことを許そう。お前たちが望むなら永遠に。

「もとの世界の体はどうなる」

山本が尋ねる。

——もちろん朽ち果てる。だが、それを惜しむお前たちではあるまい。

「聞いたかい」

振り返った田中が言った。

「信用して良いかどうかわからないが、望めば、この世界で生きていけるらしい」

「こんな何もない世界で生きたって仕方ない」

山本がそう言った途端、あたりの景色は一変した。

建物などはそのままだが、通りを忙しげに人が行き交うようになったのだ。廃墟めいた街はたちまち活気を取り戻し、楽しそうな笑顔があられている。ただ、ほんの少し、人々の服装が古くさかった。女性のほとんどは着物を着ている。

「決めた。俺は残るよ。雄さんは？」

山本が言った。

「わたしは帰る」

「そうか。こんなことをいうのは変かもしれないが、達者でな、雄さん」

「ありがとう」

「加世さん。あなたは どうする？」

山本は、加世にも尋ねる。

「私も帰ります。ここは私の世界じゃないから」

「そうか。残念だが仕方がないな」

そう言っつて、山本は、俺に手を差し出した。

「君は戻るんだろう？ 達者でな」

俺は、出された手をしっかりと握り返した。

田中が俺の肩を叩く。

「お別れだ。矢野タケシ君。良い機会だから、この際、ちゃんと名乗っておこう。わたしは田中裕吾。もつとゆつくり話をしたかったが時間がなくて残念だ」

「田中さん。あなたは、たぶん、もと軍人さんなんでしょう。だから我々は勝てた。でも、本当に向こうに帰って良いんですか？」

「帰りたいんだよ。わたしは。わたしの世界は向こうだから……ともかく君は大丈夫だよ。私が保証する」

しばらくすると、徐々にビル壁の一部が輝きはじめた。

——帰る者は、この扉を通れ。

空からの声が命じた。

「では、さようならだ」

そういつて、田中は光の中にとけ込んでいった。

俺は加世さんを見た。

「言っときたいことがある」

「言わなくていいわよ。分かるから。それに現実には、多分、あなたが考えている通りだから」

俺は肯いた。

「最後にタケシに会えて良かった」

「俺も、この世界で加世さんに会えて良かった」

俺と加世さんは手をつないだ。

そのまま門をくぐる。

耳元で誰かが叫んでいた。

「お兄ちゃん。お兄ちゃん」

目を開けると、涙に濡れた妹の顔があった。

その横には母の顔が並んでいる。

「母さん、俺……」

「タケシ、あんたミニバイクで事故を起こしたんだよ。頭を打ってね、三日間意識がなかったんだよ」

ベッドの横に立っていた白衣の男が、俺の目にライトを当てて言う。

「もう一度、精密検査をしなくてはなりません、おそらくは大丈夫です。良かったですね。お母さん」

出会い頭の車との衝突事故で、バイクは大破したにもかかわらず、奇的に体に怪我はなかった。ただ頭を強く打っただけだ。

おかげで、俺は、様々な精密検査を経て、半月後にはベッドに座れるほどに回復した。

「というわけで、死にかけている間、違う世界で闘っていたんだ」

俺は、見舞いに来てくれた叔父に、生死をさまよっている時に体験した話をした。

「ロマンチックな話だな。だけど……」

大学で、脳神経学を研究している叔父は、笑顔を見せた。

「臨死体験、仮死状態に陥った者は、よくそういった幻覚を見るものさ。タケシ、人間の頭のこめかみ、脳でいうと側頭葉にあたる部分を電気刺激すると、多くの人間が存在しないものをありありと感じるんだ。カナダ、ローレンシアン大学のパージンガー博士が九百人以上の人間に試したところ、四十パーセントの者がそういったあり得ないモノを実感したそうだ」

「つまり、事故のショックによる、脳の反応だっていいんだな」

「そうだ」

「じゃあ、確かめよう。廊下にある車椅子を持ってきて」

今日になって初めて、車椅子で病院内を移動してもよいという許しが出たのだ。

ちょうど、そのタイミングで、叔父がやってきたのも何かの縁に思える。

「すると田中裕吾という患者は、確かにこの病院にいるというのか？」

叔父が驚いたように言った。

「そう。看護師に頼んで調べてもらった。北棟四〇六号室。今まで、会うべきかどうか、迷っていたんだ」

「ここだ……だが、本当にここなのか？」

病室の前に立った叔父が、眉を曇らせた。

「そうらしい。さあ、中に入ろう」

六人部屋の、一番奥の窓際に田中裕吾はいた。ベッドで横になり眠っている。

「あの、何か？」

ベッド脇の椅子に腰掛けた、年配の女性が立ち上がった。

「この方が田中裕吾さんですね」

「そうです。お知り合いですか？」

「まあ、そうです」

「不思議ですわね。祖父は、認知症になって、もう十年以上も、こんなふうですのに。どこで知り合われたんですの」

「僕が子供の時のことです」

適当に答えながらベッドの壁に貼られたネームプレートを見る。

そこには田中裕吾・九十六歳とあった。

皺に埋もれた顔には、あの世界でみた面影が残っていた。顎には、見覚えのあるホクロもある。

「でも、今日、来ていただいて良かった。祖父は今まで何度も危篤になっっているんです。幸い、その度、持ち直していますけど」

「そうですか……お休みのようなので、今日は、これで失礼します」

そう言っ出て行きかけたが、ふと思いついて振り返った。

「ああ、ひとつ良いですか？田中さんは、お若い頃、軍人さんでしたね？」

「ええ。武器の開発をしていたそうです。南部麒次郎という方のもとで」

丁寧に礼を言って、叔父と共に介護病棟を出る。

談話室まで来た時、叔父が言った。

「さっきの南部麒次郎とは、確か南部一四年度自動拳銃の設計者だったな」

「そうらしい」

「山本という名の患者は？」

「そういう名の患者は、三人いたそうだけど、みんなこの十日ばかりの間に死んだそうだ」

「どうせ、吉田という患者も死んでるんだろうな」

「その通り」

しばらく黙り込んだ後、叔父が尋ねた。

「松本加世は？」

「いたよ」

「いた？」

「俺が、昏睡から目覚めた翌日に、眠るように亡くなったそうさ。老衰で何度か危篤になったものの、その都度持ち直していたらしい。八十四歳とは思えない、気丈で美しい人だったそうさ」

叔父は、優しい目をして俺を見つめ、言った。

「つまり、お前は、この病院で死にかけて人間が『あの』戦場にかり出され、闘い、生き残った者の寿命だけが延びていた、と言いたいんだな」  
「だから、あの世界の町並み、ビルは昭和三十年代のものだった。老人たちの世界観さ。田中さんたちの顔が、懐かしくはあるけど、ちよつと変わっていたのは……」

俺が言葉を切ると、叔父があとを引き取った。

「今の若者の顔ではなくて、昔の日本人の顔だったから、か。だが、そんなことは信じられない。病人の名前だって、ただの偶然だ。だいたい、なぜこの病院の患者から選ばれるんだ？理由がわからない」

「きつと、向こうの世界の理屈なんて、俺たちには分からないものなんだよ。今となってはどうでも良いことさ。ただ……」

「ただ？」

俺は空を見上げ、いった。

「もう一度、加世さんに会いたかった」

△▽△